

## 日中経済交流研究会新聞

## 日中経済交流研究会 2月例会報告

## ベトナム人社員とともに夢をかなえる

報告者：株式会社三栄金属製作所 文敬祚（山下裕司）氏

日時 2019年2月8日（金）／ 場所 大阪産業創造館

参加者 40名

〔会社概要〕 本社：大阪市生野区 創業：1970年

事業内容：プレス・金型・樹脂成型など 売上：6.3億円

従業員数：国内82名（うちベトナム人35名）、ベトナム工場34名

父が創業したプレス工場を後継した文社長。12年前からベトナム人を雇用し始め、いまではホーチミン近郊に工場を構えています。その現在進行形の奮闘記。今年度からプラスワン委員会を立ち上げた当研究会としても、対象として最もホットな地域であるベトナムでの会員によるケーススタディです。



## ベトナムとの出会い

仕事が殺到してこなしきれなくなった2006年のある日、1枚のファクスが流れてきて知ったのがベトナム人実習生の制度。翌年2人の実習生を雇いました。21歳のティエン君と22歳のトゥエン君。「できるのかな」と見ていると黙々と器用に仕事をこなし、残業もすすんです。1週間もたたずに仕事を覚え、感動しました。「これはすごいな」。若いベトナム人が頑張る姿を見て年配の日本人が応援しました。この子らを大事に育てていこうという雰囲気。それから実習生やエンジニアを毎年採り続けています。

## 海外進出への思い

10年前に50歳で同友会に入り、訪中団にも参加。中国のプレス屋さんを見学し、日本企業やローカル企業も見ました。「大陸はすごい。海外で何とか工場をしたい」。海外進出への思いが芽生えます。

実習生制度もいまは5年に延び、その先の永住も可能になりました。しかし、かつては3年で帰らないとダメ。「この子らのために向こうで工場ができないか」との思いが高じて、ホーチミンに駐在事務所を作って模索し始めたのが2010年。台湾や韓国系の工場はたくさんあっても、日本の仕事は品質や納期に厳しいから敬遠される。日系の金属プレス屋、金型屋は無かった。これなら日系のお客さん相手にできるのではないかと。

社内の反対を押し切って2013年、ベトナム工場を立ち上げました。超円高の時、チャンス到来と思いました。日本で廃業した会社の中古プレス機を送り、国際協力銀行からの借り入れで金型設備一式をそろえました。

## 逆境の中で

しかし仕事は苦難のスタート。粗利も赤字、やればやるほど赤。折からの円安が追い打ちを掛けます。日本から仕

事を送っても焼け石に水。日本から送金し続ける日々。日本の本社の業績は良かったけれども、ベトナムにお金が行くことで社員から突き上げられます。「社長、どないしてくれまんねん。ボーナス少ないのは、ベトナムにお金を送るからですか？」

文社長は自らベトナムで営業に専念することを決心。日系の大手企業から受注します。しかし安心していても、お客さんから日本に直接電話でクレームが。「納期が守れていない、どないなってるねん」——。そこで2016年から現地の社長として乗り込みます。工場長、総務、ワーカーたち、自分以外はすべてベトナム人です。当初からのレンタル工場の家賃が高騰したのを機に、2018年には自社工場を建設。なんとか営業利益が出るころまでこぎつけました。

## ベトナムに骨をうずめる！

いまは1カ月のうち2週間ほどがベトナムです。毎朝暗いうちに起きて片道60円のバスで2時間近くかけて通勤します。始業は8時でも6時半には到着、なぜそうするか。「社長の背中を見せないと社員は働かない、それほどこの国でも一緒」

雇用したベトナム人には日本式の社員教育をし、品質や納期管理も日本のルールを徹底します。試算表も公開し、「利益が上がったら給料が上がる、日本並みの給料をもらえるように、みんなが幸せになるように」と、そう語っています。

バス通勤での帰路、市場に立ち並ぶ露店のにぎわい、道端に小さな椅子を出して夕ご飯を食べる風景をよく見ます。高度経済成長だった昭和30-40年代の日本と重なります。「会社はベトナムに関わったから伸びた。昔は夢にも思わなかったが、今ではこちらに骨をうずめる覚悟。今年60歳、これから5年間は必死にやる。そして70歳まではじっくり考える。ベトナム工場の後継者はベトナム人がいい」と語る文さん。夢への挑戦はまだ続きます。

（まとめ 坂元鋼材株式会社 坂元 正三）